



Family Life

Domestic Roles and Social Organization

# 家族生活の

# 社会学

家庭内役割の  
不平等はなぜ続くのか

グラハム・アラン

天木志保美 訳

Graham Allan

## 家族と社会の全体像をとらえる

結婚・離婚、妻の就業・夫の失業、ひとり親家族とこども、  
高齢者介護。家族生活をトータルに解く鍵は、家庭内役割  
とジェンダーの不平等にある！ 家族・福祉・介護の現場で  
格闘する読者に贈る現代家族理論。

新曜社

**Family Life**

**Domestic Roles and Social Organization**

**家族生活の**

**社会学**

家庭内役割の  
不平等はなぜ続くのか

グラハム・アラン

天木志保美 訳

**Graham Allan**

新曜社

Graham Allan

FAMILY LIFE

Domestic Roles and Social Organization

Copyright © Graham Allan 1985

First Published 1985

Japanese edition © Shihomi Amaki, Shinyosha

All Rights Reserved. Authorized translation from the English language edition published by Blackwell Publishing Limited. Responsibility for the accuracy of the translation rests solely with Shinyosha Limited and is not the responsibility of Blackwell Publishing Limited. No part of this book may be reproduced in any form without the written permission of the original copyright holder, Blackwell Publishing Limited.

Japanese translation rights arranged with John Wiley & Sons, Ltd., Chichester, West Sussex, UK through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

目次

訳者まえがき v

謝辞 x

第1章 序論 ..... 1

第2章 社会のなかの家族 ..... 7

タルコット・パーソンズ——構造的に孤立する夫婦家族

ユージン・リトウオク——修正された拡大家族

修正された基エレメンタリ礎家族？

家族か女性か？ 家庭内役割の創出

家族の形成

第3章 女性、結婚、家事労働 ..... 37

結婚と家族形成

労働としての家事労働

自立性

無給

プライベートセッション

私生活

ママザリング

母親であること  
雇用への復帰

## 第4章

家庭と余暇

家庭中心性

物質的变化

関係性の変化

余暇と社会統合

参加する自由

ソーシャル  
社交的關係

階級の差異

ジェンダーの差異

「コミュニティの喪失」

第5章 結婚——不平等な関係……………115

意思決定アプローチ

家庭内の労働分業

依存の構造

結論

第6章 離婚とひとり親家族……………147

離婚

離婚原因

ひとり親家族

ひとり親家族の物質的境遇

子どもと離婚

離婚、社会的孤立、再婚

再編家族

第7章 高齢者、家族、コミュニティ・ケア……………183

コミュニティ・ケア

コミュニティ・ケアとインフォーマルな関係性

公共政策、高齢者、家族ケア

第8章 失業と家族生活……………213

失業——その実態

男性の失業

女性と失業

失業と家庭内の労働分業

第9章 結婚、家族、国家……………247

参考文献……………259

訳者あとがき……………275

事項索引・人名索引……………284～288

装幀 鈴木敬子 (pagnigh-magnigh)

## 訳者まえがき

研究者として振り返るとき、職業柄、講義や学生からのニーズもあって、たくさんの本を手にしました。自分の糧となりテーマとなり、あるいは未だに解けぬ問題を含んでいるので何十年も離れられないような書は、私に限らず意外に少ないものだと思います。私にとってグラハム・アランはそのたぐいの著者で、『ファミリーライフ』（原題）の日本語版が刊行されるのは、ほんとうにうれしいことです。

日本語の書名には、「家族生活」の語が入ることが好ましく、『家族生活の社会学』としました。なぜならば、「生活」という視点こそ、現代家族を統一的にとらえることのできる切り札だと思われるからです。トータルに「生活」をとらえようとすることで、ともすればバラバラに論じられている家族をめぐる諸問題を統一的に把握することが可能になります。例として適切かどうかわかりませんが、こどもを医者に連れて行って、患部についてだけ話を聞かされると、こどもの生活すべてを考慮して説明されることの違いと云つたらよいでしょうか。

そして、現代の結婚も、女性の職業の話も、トータルに生活の局面で把握することに力点が置かれることにより、通説に含まれる欺瞞、さらには構造的な矛盾が明らかになります。女性の職業生活や女性に限らず家庭生活の記述は、イデオロギーも加担して、ともすれば一面的、自己欺瞞的な言説になりがちであるなか、私などは何度か救われる思いがしたものです。

『ファミリールイフ』は、じつくりと丁寧に読み込む価値のある書と思います。人によって気づく局面は違うでしょうが、一般的、表面的な家族理解を超える卓見がそこに見いだせると思います。

研究時間が確保できずに、だからだと二十年以上も抱えてしまいました。校正にあたって改めて一文一文を読んでいると、読み込むほどいい本だなあと感じます。アランはきわめて端的な表現の中にとんでもないことを、私などは何年も疑問を抱えていてようやく到達した観念を、考え抜かれた一文でさりと言つてのける名人です。

たとえば、「デュアル・キャリア・ファミリール」（これは、夫と妻がともに良い職に就き高額の給与を得ている家族を指す語で、キャリアアウーマンの語が輝きを放っていた頃、ともすれば理想の夫婦家族であるかのように考えられていたものです）について論じている部分。デュアル・キャリア・ファミリールは、職業と家庭生活の運営と責任で手いっぱい、組合なども含めて社会参加、余暇参加が最も少ない。豊かな給与によって子育て等に多くのサービスを得ることができるともかわらず、もつとも余裕のないライフスタイルを余儀なくされている、ゆとりのない「問題家族」のごとくに紹介されているのです。

たとえば、離婚後に社会関係が変容する一つの例として、友人たちと疎遠になるという記述ですが、その例証として調査回答者の「私は、これらの人々（友人たち）をみんな、ビジティング・リストから消してしまった。問題は、彼らがそれに気づいたように見えないことなの！」の陳述。職業や離婚で社会の中の位置づけが変わると、いつの間にか友人が目の前から消えている。現代の社会関係がきわめて端的に捉えられていないでしようか。

フェミニズム以来、ジェンダー、高齢者、福祉、ケア等々と、家族をめぐる諸課題が次々と社会問題化し、家族社会学もそれにこたえてきました。けれどもそこには、家族社会学ならではの大きな壁が存在するように思われます。というのは、家族について論ずる場合、そこかしこに個人か家族かの陥穽が存在するからです。その好例が本書でも繰り返し取り上げられています。家族の生活を支え、またその（有給）労働は家族によって支えられているにもかかわらず「あくまでも個人単位に支払われる賃金」や、個人と家族の姿が二重写しにならざるを得ない「年金」（たとえば第3号被保険者制度、いわゆる主婦の年金）といった矛盾で、混乱を生むだけでなく、不平等を固着させる元凶でもあります。あるいは福祉の諸手当やケアの配分においても、ケアを受け取る側の家族的背景が勘案されないことはなく、家族でケアを担う側からすると、苦勞してケアをすればするほど支援を得にくくなるという矛盾が生じたりもするのです。等々。

問題は、家族社会学自身も、ともすればその罫にはまってしまうことです。特に、社会学のみならず社会科学・社会論全般において、理論的に通りの良い「選択、自由、個人主義」（個人主義パラダイム）に抗するのは簡単なことではありません。近代家族の成立、夫婦家族の成立についての議論まではまあまあ何とかなつた個人主義パラダイムですが、もはや家族の解体を論じ、家族がメンバーごとに取り上げられる昨今のテーマにおいては、ジェンダー、高齢者、離婚等、一つ一つの問題を個別に——個人主義パラダイムに抵触することなく——論ずることはできても、家族を全体として論ずることが非常に困難となります。その局面を打開するのは容易ではありません。

アランの家族論の特徴は、それぞれ個別に論じられてきた、ジェンダー、高齢者、さらには解体し多様化する家族（離婚、再婚、ひとり親家族、ステップ・ファミリーなど）の諸問題を十分に踏まえながら、それ

らを統合する、体系的、統一的な家族論を展開していることです。

離婚、ひとり親家族、さらには失業を論ずるにあたっては、アランはこどもに焦点を当てることを忘れていません。ステップ・ファミリー（再婚でつくられる家族。したがって生みの、義理の、と複雑な家族関係が現出する）のこどもに焦点を当てた人間関係の「綾」の分析は、アランならではのと思われれます。個人主義的な家族論ではめったに触れられないし、論じようとしても論理に支障をきたすことになりそうです。現在類出している家族ならぬ家族を、こどもに焦点を当てて論ずる。この点だけでも、特筆に値するでしょう。

現代家族については、論点が出尽くしたとは言わないまでも、論点、問題点の蓄積はすでに相当長年にわたり、広範囲にわたっています。そろそろ諸問題相互の関連等を、家族の全体像あるいは家族と社会の見通しの良い構図の中に把握したいところではないでしょうか。

『家族生活の社会学』は、現代家族の全体像をバランスよく把握する書としてきわめてすぐれていると思います。大学で家族社会学の講義をしていたとき、家族の全体像を統一的に講義する上で、依拠する書物がないと感じていました。大学のみならず、家族について論ずる、あるいは学ぶ機会はいまや格段に増えています。家族と無関係ではいられない諸々の職種、資格も数多く存在するからです。本書は、現代の家族を論ずる人々、家族について学びたい人々、探究したい人々にとっての参考書として最適だと思います。

そして何よりも、現代の家族に問題を感じながらも家族と格闘している人々が抱えているわだかまりが一部なりともすっきりと溶解する感覚を本書がお届けできますように祈っております。

二〇一五年八月

訳者



## 謝 辞

本書は、ここ数年、サウザンプトン大学で私が行ったいくつかの家族社会学の連続講義を發展させたものである。受講した学生たちの批判とアイデアに感謝する。またサウザンプトン大学の社会学・社会行政学部の同僚たちのサポート、なかでも学部長として書物の刊行に必要な資源を利用できるようにしてくれた、ジョン・マーティン教授とジョン・スミス教授に感謝したい。

著作権のある資料の使用を許可してくれた下記の出版社に感謝する。エッジエル著『中産階級カプトル』の表はジョージ・アレン・アンド・アンウイン、アン・オークレー著『家事の社会学』の表はベイジル・ブラックウェル、クリス・ロシター、マルコム・ウィックタス著『危機かチャレンジか？ 家族ケア・高齢者・社会政策』の表は家族政策研究センター、A・H・ハルセー編『一九〇〇年以降のイギリス社会の潮流』の表はマクミラン（ロンドン）とベイジンストーク、ミハエル・ヤング、ピーター・ウイルモット著『対称家族』の表はルートレッジ・アンド・ケーガン・ポール。

スー・アラン、グラハム・クロウ、ジョアン・ヒギンズ、ジェニー・メイソンの励ましと援助に特に感謝したい。彼らは草稿を読み、指摘やコメントを与えてくれた。それが本書をずっと良い書物にしてくれた。「モーティス」、ニックとチュリシーもさまざまなやり方で、インスピレーションを与えてくれた。最後に、決して最小という意味ではなく、私の要求したどんな不合理な締切にも、草稿のすべてをすばやく正確にタイプしてくれたバム・ロバーツに感謝したい。彼女の努力と献身がなければ、完成までにずっと長い時間がかかったであろう。本書は彼女の働きに多くを負っている。

## 第1章 序 論

すべての社会制度のなかで、家族はおそらくもつとも矛盾したイメージに満ちた制度である。一方で、家庭と家族はしばしば外界の厳しい現実から隔てられた天国と見なされる。それは、私たちのもつとも有意義で、強烈で、報われることの大きい愛着と経験の自然な場所とされている。確かに配偶者や子どもたちとの関係性は、私たちが創造するなかでもつとも貴重なものと一般に受け止められ、家族への責任は私たちの行う多くのことに究極的な正当性を提供する。結婚は、私たちの社会が成人期の指標とするほとんど唯一の「通過儀礼」であり、従来どおり、現在も世間に浸透している。離婚の発生率の高さにもかかわらず、親はこどもたちが結婚し、落ち着き、彼らがこどもを持つことを望み続けている。これがひとたび達成されると親の仕事がともかく終わるだけでなく、安定した幸福な家族の存在は人生それ自体の主要なゴールであると多くの人たちが見なしている。同様に現代の結婚は、かつての結婚と比較して質的によりよく描かれる——以前よりも平等で、思いやりがあり、友愛的である、等々。

しかし同時に、近代の家族はきわめて深刻な衰退の状態にあると描かれるのが通例である。日々の不測の事態に対処するために、家族成員がお互いに依存しあうことのできた過去の時代とはまったく異なり、現代の家族はかつての特徴であった、集団としてのサポートと心の支えを提供することができないといわれている。<sup>ファミリー・ライフ</sup>家族生活は、私化され孤立するようになった——すなわち各世帯が自らの小さな器に閉じ込められて何とか生活している——だけでなく、もつと重要なことには、家族関係が不安定化し、明らかに思いやりもなくなつた。伝統的な家族的価値や結<sup>ソリダリティ</sup>束が崩壊した証拠は、至るところに現れている。離婚率の上昇、家庭内暴力のレベル、高齢者のネグレクト、「カギっ子」の数、不倫関係の頻度、等々のすべてが、いまだはいかに家族組織が脅かされているかを示している。また広範な社会問題の多くが家族パターンのこうした変化に由来している。たとえば、若者に見られる強奪、破壊行動、その他の少年犯罪の増加は、学校の規律の問題とともに、家族組織の崩壊によると考えられるのが通例である。一九八一年のインナー・シティの暴動に際して当時の内務大臣が即座に対応し、こどもたちの犯罪行動の責任を親に引き受けさせる法律制定を検討したことが、適切な例といえよう。

家族についての私たちの日常的な見方が矛盾とあいまいさに満ちているのは、特に驚くべきことではない。そのような見方は、本質的に家族生活の客観的な記述ではなく、社会で生起していると私たちが認識する社会的傾向や動向を説明しようとする試みであるからだ。私たちはその一貫性について多くを悩むことなく、家族生活について私たちの抱くさまざまなアイデアから必要に応じて、これやあれやの要素を選択し強調するのである。そうするなかで、現在の経験は多くの場合、いくらか理想化された状況を背景として解釈される。コミュニティの観念と同様、五〇年前、二五〇年前であっても、幸福な過去への言及が今日の問題の

理解を可能にする枠組みを提供するのである。

もちろんそれと同時に、家族生活についての私たちの経験自体が変化している。家族は、社会的、身体的再生産の主たる場所であるが、決して不変ではなく、社会全体の物質的、文化的基盤の変化につれて変わっていく。確かに以前の時代と比較すると、現在人々の家族の境遇には多くのバリエーションと可変性がある。ある意味で、家族生活は予測できなくなっている。一世代前でさえ「家族サイクル」——結婚から死に至るまでに家族が通過する、ほぼ変わることのない構造化された一連の諸段階を指す——という観点で家庭的境遇を分析することはさわめて賢明であったが、今日ではまったくそうではない。とりわけ、離婚、ひとり親、再編家族の増加、既婚女性の雇用パターンにおける変化は、家族の経験にずっと大きな多様性をもたらし、家族サイクルを経験的にいっそう面倒なものにしている。

家族や家庭の経験がランダムであり、もはやパターン化されていないと論じているのではない。それらがいまなお体系的に構造化されているのは、明らかである。とりわけジェンダー間、世代間の関係に関しては、しかし——現実および想像上の——変化が、多くの問題を惹起している。家族は私化され、コミュニティ全体から切り離されてしまったのか？ もしそうであるならば、このことは夫や妻、子どもたちや高齢者にとって、どのような意味をもつのであろうか？ 結婚は崩壊しつつあるのか、あるいは逆に民主的で報われる関係性となることを通して強化されつつあるのか？ 妻の雇用パターンの変化は、家庭の組織化や家族関係に影響を与えたのか？ 高い離婚率の結果はどうなっているのか？ 親の別居や離婚によって子どもたちはどのように影響されるのか？ 高齢者は家族によってネグレクトされているのか？ 等々。

本書の目的は、このような疑問や問題の解明にいくばくかの光を当てることである。最近の社会学的調査

研究を参考にすることによって（以前の研究もあるが）、家族と家庭生活の現代的パターンの分析を試みる。とりわけ家族がその内部で機能している広範な社会的、経済的コンテクストによって、家庭生活の組織がどのように構造化されるのかを示そうと思う。タイトルが示すように、ここで重要なことは、家庭内のジェンダー間の仕事と責任の分業が、家庭外で生じる分業と不平等によって形づくられ、またそれらを形づくるやり方を明るみに出すことである。これは本書を通じて繰り返されるメインテーマである。

本書は、このような問題への入門書を意図している。専門家よりもむしろ、社会学が家庭生活の理解にしうる貢献についてもっと知りたいと思う人々のために書き下ろされた。したがって、多くの予備的な知識や読書を想定していない。特に、本書が何らかのフォーマルな立場で——学部 학생、たぶん上級課程の学生として、あるいはソーシャルワーク、訪問看護、その他の専門家の訓練の一端として——社会学を学ぶ人々、そして単に家族社会学についてもっと知りたいと思う人々に役立つことを願う。すべてのテキストの例に倣って著者の関心に従い、いくつかのトピックを徹底的に扱い、他方でまったくおろそかになったものもある。それでもなお、本書の目的は、家庭生活の社会学的分析への手ごろで役に立つ総合的入門書を提供することである。

第2章では、社会のなかの家族と他の諸組織との関係を扱う。現代の家族が果たす役割、家族がどの程度社会にとって周縁的になってきたかを研究する。また、家庭生活内部のパターンが、外部の諸組織の要求によってどのように形づくられるのかを示すよう試みる。第3章では家族内の分業の結果を分析しよう。前章での議論を足掛かりにして、家庭生活の日々の要求が妻や母としての女性たちの経験をどのように形づくり、女性たちの開かれた機会を制限するかを検討する。第4章では、家庭生活が私化されてきたという考えに焦

点を当てる。「家庭中心性」の成長と、それが余暇パターンや社交的活動に及ぼす影響を検討する。第5章は、現代の結婚の特質について、とりわけ結婚の結びつきが不平等にとどまる程度を扱う。結婚の平等を測定するさまざまな方法を研究し、結婚の構造と家庭領域外の要因を結びつけてみよう。続く三つの章は、現在大きな社会的関心となっている問題を検討する。第6章は、結婚崩壊や離婚の現代的なパターンを分析する。前章までの分析に引き続き、とりわけ女性のライフスタイルに離婚が与える影響を扱う。第7章は高齢者と、高齢者の増大が家族生活に与える帰結に焦点を当てる。とりわけ娘たちが高齢者のケアに果たす役割と、それが娘たちの生活に与える影響を分析する。また現在のコミュニティ・ケア政策が、家族／娘の提供するケアに影響する程度も検討する。第8章は、失業が家族生活に与える影響を評価する。とりわけ失業が、家庭内の仕事と責任の分業に影響する仕方を研究し、世間一般の見方とは反対に、先行する章で明らかにした結婚と家族生活の基本構造は、失業によって脅かされるのではなく、むしろ強化されるという結論に至る。最終章では結びとして、さまざまな国家政策がいかに家族生活を侵害しているかを簡潔に検討する。本書全体の流れに沿っておもに扱うのは、最近の政策がいかに家庭生活の組織化においてジェンダーに基づく分業を前提とし、結果としてその維持を助長しているかである。



## 第2章 社会のなかの家族

本章ではおもに、今日の社会のなかで家族が果たす役割を扱う。家族と他の社会諸制度の間に存在する関連を検討することによって、社会構造の中に家族を位置づけたい。そうすることで、他の諸制度が血縁関係に基づく関係性を利用する仕方、そして諸制度の要求がどの程度家族生活の組織を形づくるのかを分析しよう。このような関心は家族社会学の展開において中心的であったし、また多くの世間一般の論議も生みだしてきた。なかでもっとも優勢な見解は、産業化とともに家族は次第に社会生活において重要ではなくなってきたというものである。演劇のアナロジーを用いるならば、かつては舞台の中心を占め、大半の出来事にかかわってきたが、いまや家族は舞台脇に退き、まったく重要でないわけではないが、劇の進行からは遠く離れている。このプロセスは大きな拡大家族から、現在一般的である小さな核家族への変化に伴うと見なされている。

家族が周縁的になったという見解をもっとも十全に体现している社会学的パースペクティブは、アメリカ